乳香とオマーン
―― その歴史、文化、観光について ――
―― 研究ノート ――

Frankincense and Oman
―― notes on its history, culture and tourism ――

小　磯　　学

キーワード：乳香、香、交易、アラビア半島、オマーン、観光

要　旨

乳香（フランキンセンス）とはアラビア半島南部やアフリカ北東部に産する乳香樹の樹液が固化したもので、数千年前からエジプトや地中海沿岸、あるいは東方のアジア方面にまで運ばれ、希少で高価な香料・薬剤として人々に好まれ続けてきた。とくにその品質の高さで知られるオマーン南部のドファール地方の乳香は、これに関わる交易活動の長い歴史を物語る遺跡群と今日なお伝承・維持されている文化的伝統と景観が評価され、世界文化遺産にも登録されている。観光者の数はいまだ限定的ではあるが、近年のペルシア（アラビア）湾岸諸国全体の経済活性化とも相まって、国際的な観光スポットとして注目を浴びつつある。

本稿ではこうした乳香の歴史的文化的背景とともに、これをめぐる観光の現状を振り返る。

はじめに

> ３人の博士たちは、「…母マリアのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた」
>
> ―「マタイによる福音書」第２章11節、『新約聖書』（日本聖書協会　1977）

イエスの誕生の際に貢ぎ物として３人の博士が持参した贈り物のうち乳香と没薬は、香道やアロマセラピーを嗜む人々を除くと、多くの日本人にとっては馴染みが薄いかもしれない。しかしこのいずれもが、かつては金と同じ重さで取引されるほど高価でかつ神聖視された品物であった。今日ではその経済的価値は大幅に下がってしまったものの、これら香料への特別な想い、その文化的重要性は今もなお変わることなく受け継がれている（図１）。

乳香（英語：frankincense, olibanum, アラビア語：lubān）とは、ムクロジ目カンラン科ボスウェリア属の樹木（*Boswellia carteri*）から分泌される乳白色から淡緑色の樹液が固化したものであ

図１　香を焚き客人をもてなす。カタール政府主催ピース・ボート歓迎会。ドーハにて
（2015年９月、撮影：小磯）

図２a　野生の乳香樹。ドファール地方西部（2014年２月、撮影：森北周次氏）

図２b　樹皮の間から染み出す乳香
（撮影：森北周次氏）

る（図２a、２b）。この乳香樹の主な分布域はアラビア半島南部のオマーンやイエメン（ソコトラ島を含む）、アフリカ北東部のソマリアで、さらにエリトリア、エチオピア、また一部その固有種がインド北部にも生育する（インド乳香 *Boswellia serrata*）[1)]（図３）。没薬（ミル、ミルラ。英語：myrrh, アラビア語：mur）も同じくカンラン科コンミフォラ属の樹木の赤褐色の樹脂で、イエメン、ソマリアなどその分布が一部乳香と重なるほか、さらにスーダンや南アフリカなどにも見られる。いずれもその独特の芳香性ゆえに炭火の上で焚く香として（図４）、あるいは薬剤などとして数千年来重要な交易品として位置づけられてきた（Highet 2006；谷田貝　2005：642－645、840－842）。

このうち乳香は、オマーン南部のドファール地方の山麓地帯に産するものが最高品質とされている。それはイエメンとの国境近辺から東へ東西約300㎞、南北約70㎞に広がる海寄りに面したドファール山地の斜面で、アラビア海に吹く南西モンスーンの影響を受ける土地である。６月半ばから９月半ばにかけて10－30㎜／月のわずかな降雨と海風がもたらす80－90％の湿度と霧、そして石灰質の土壌がこの樹木の生育に適しているとされる。高さ３－５ｍほどの木の樹皮に傷をつけることで染み出す樹液を秋と春に収穫するが、秋ものの方が質が良いという（Vine 1995: 47－49；ウェブ：国際耕種株式会社　1995；Environmental Society of Oman）。

ドファール特別行政区内の乳香の群生地とともに、かつて交易で栄えた都市や港の遺跡を含む４つのサイト全体が「乳香の土地」として2000年に世界文化遺産に登録された（ウェブ：Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Dhofar Governorate）。古代旧世界において最も高価な贅沢品のひとつであった乳香が、数千年にわたりヨーロッパ、そして南アジアや東南アジアへと

図３　乳香の主な分布地
（Highet 2006に基づく。Google Map に加筆）

図４　乳香が焚かれる店先。乳香が袋詰されている。マスカット（2000年９月、撮影：小磯）

交易された歴史的背景や交易活動の証である遺跡、乳香樹が栽培される土地の文化的景観、そして今もなお栽培され香料や香水の原料として利用されている点を評価するものであった。後述するようにドファール地方へのインバウンドはいまだ限定的とはいえ、この乳香をめぐる文化が、オマーンにとってより一層重要な国家的な文化・観光資源として位置づけられている。

このことはまた、オマーンも加入するペルシア（アラビア）湾南岸の６か国から構成される湾岸協力会議（GCC）の国々（アラブ首長国連邦、オマーン、カタール、クウェート、サウジアラビア、バハレーン）（図３）全体が概ね順調で安定した経済成長を遂げ、世界中に注目されていることとも無関係ではない。ドバイが位置するアラブ首長国連邦を筆頭に、ヨーロッパを初め世界中からこれらの国々を訪れる観光者が着実に増える傾向にあり、そのことがオマーンにも目を向けさせる要因にもなっている。

以下ではまず、乳香が古くから交易の重要品目として貴ばれてきた歴史を概観しておく。

１．乳香の歴史

１－１．古代エジプト、メソポタミア

世界最古の芳香樹脂の利用が見られるのは古代エジプトとされ、ピラミッドが建設された時代からさらに1000年ほど遡る紀元前4000年頃のバダリ文化の墓の副葬品のなかに、儀礼的に香が焚かれた痕跡があるという（谷田貝　2005：643）。対外交易が活発であった紀元前3000年頃の古王国時代の第５－６王朝には、今日のエジプト南東部（ないしソマリア、イエメンを含む土地）にあったとされるプント国から銅、木材、象牙とともに乳香が輸入された。ラー神に祈りを捧げる際には「香烟によって霊魂を天に呼ばせ給え」と唱えるならわしで、日の出には樹脂香（乳香）、日中は没薬、日没には16種の香料を混ぜ合わせた練香キフィが焚かれていた（藤巻 他　1980：46）。

新王国時代（紀元前1500－1000年頃）の『死者の書』には、「地上に落ちた神の汗」である乳香を牛の乳とともに焚べることで心身を祓い清め穢れや邪悪なものを遠ざけたことが記述されており、ハトシェプスト女王はプント国の乳香や没薬を得ることに腐心していた（山花　2010：

26－29）（図５）。またこれらはツタンカーメンの副葬品にも見出すことができる（Vine 1995: 47）。

前１世紀、プトレマイオス王朝のクレオパトラ７世もまた、乳香を含め多様な香料を好んだことはよく知られている。

メソポタミアにおいても紀元前2500年頃には祭壇で乳香が焚かれていた記録が残り、神に捧げ悪霊を追い払うために用いられた。これを意味するアッカド語の labanatu が今日のアラビア語の lubān の語源とする見解もある（山田 1979：86－88）。

図５　ハトシェプスト女王葬祭殿に刻まれた香木（右）とプントの住宅（左）（©Hans Bernhard, Wikipedia-Land of Punt）

１－２．古代ギリシア

紀元前５－後１世紀頃には、ギリシア人が乳香や没薬について多くの記述を残している。ヘロドトス（紀元前５世紀）の『歴史』は、「人間の棲息地として最南端」のアラビア人の土地だけに産するこれらの香料がペルシアのダレイオス１世に献上されたことを触れている。また「植物学の祖」と呼ばれるテオプラストス（紀元前４－３世紀）は、これらの樹木に野生のものと栽培されているものとがあり、切り傷をつけるか自然に分泌した樹脂を集める様子などを具体的かつ詳細に記している。この土地はカタバニアやハドラマウトと呼ばれる国によって支配され、主にサバ人が乳香の交易に従事していた（山田　1979）。

こうした香料に恵まれているこの土地を「幸福なアラビア Arabia Felix」と表現したのがディオドロス（紀元前１世紀）の『世界史』で、香りに富んだ植物とあらゆるハーブの馨香が全土に滲み込む夢のような土地として描写されている。それはユダヤ教やキリスト教の『聖書』・『旧約聖書』に記述されたエデンの園のイメージとも無関係ではないという意見もある。ストラボン（紀元前１世紀）の『地理書』は、乳香や没薬だけでなくシナモン、バルサム、匂いの強い薬草の産地であるとし（山田　1979：91－96）、さらにケルスス（紀元前１世紀）の『医学論』にも、乳香とその煤が傷口の膠着や出血止め、浄化などさまざまな薬効を有することが詳述されている（野田　2012：14－18）。

紀元前４世紀のマケドニアのアレクサンドロス大王と乳香との関係については、のちにローマのプリニウスが著した『博物誌』（紀元後１世紀）の記述がよく知られている（Rackham 1960: 45；Schoff 1912: 123）。それによれば、幼少のアレクサンドロスが乳香を大量に火に焚べて浪費しているのを見た家庭教師のレオニダスが、そのような行いはご自身が乳香を産する土地を支配できるまで慎むよう叱責したという。その後20歳で王となったアレクサンドロスは東方遠征によってその乳香の土地を手中に収め、レオニダスに大量の乳香を送ったという。そしてまたこの東方遠征を機に西アジア一帯の乳香・没薬の需要が一層高まり、より東方のアジアへの交易が促されることにもなった（Vine 1995: 48-49）。

１－３.『聖書』

「乳香」という文字は『旧約聖書』に22回、『新約聖書』に３回登場し、大部分が前者に集中しいている。多くの場合に礼拝の際に薫香として焚かれるが、創傷治療薬として用いられた記述も『旧約聖書』に３ヵ所見られる（野田　2012）。

『旧約聖書』のなかではシバ（シェバ）の女王（紀元前10世紀頃に今日のイエメン、ないしエチオピアを統治したと伝えられる）がイスラエルのソロモン王に謁見するにあたり、大量の香料、金、宝石を持参した物語が有名である。乳香がシバの特産であることから、この香料こそが乳香であったとされる（「列王記」上第10章２、10節、「歴代志」下第９章１、９節、「イザヤ書」第60章６節、「エレミヤ書」第６章20節、日本聖書協会　1977）。

またその他『旧約聖書』の随所には、主（神）の祭壇に香を焚くことを絶やしてはならないことや他のさまざまな香料と混ぜた香物の作り方などが詳しく記されており、『旧約聖書』、すなわち『（ヘブライ語）聖書』をまとめたユダヤ教徒にとって乳香が祈りの象徴でもあり、それこそが神と彼らとを結びつけていたことが窺える（山田　1979：159）。

そして冒頭で触れた『新約聖書』「マタイによる福音書」第２章11節に記された生誕時のイエスへの３つの贈り物は各々「乳香＝神、没薬＝救世主、黄金＝王」を表し、さらにキリスト教では一般に「乳香＝神に贈るもの、没薬＝死者に贈るもの、黄金＝王に贈るもの」とも解釈されている（図６）。「死者」については、イエスがやがて救世主として死ぬことを予見するものでもあった。このことは、西アジアではさらに古い時代から乳香や没薬が人を救うと信じられていたことに起因するという（山田　1977：8；野田　2012：10；谷田貝　2005：643）。

乳香は通常の香炉で焚くだけでなく、教会の内部では鎖の先に吊るした振り香炉を手に下げて振り（巨大なものは天井から吊り下げて振る[2)]）、神の像や信徒らに撒香（炉儀）を行う。これには香によって場を清め、祈りを神に届けるとともに、信徒らによき香りを放つ生き方をすることを促す意味も込められている。

かつてはキリスト教全般で礼拝時に振り香炉で乳香を焚くことが一般的であったが、今日では主にギリシアやロシアに伝わる正教会で用いられ、一部大祭などではカトリックや（カトリックとプロテスタントの中間と位置づけられる）聖公会でも用いられることがある。一方で、儀式にそれほどこだわらないプロテスタントでは、振り香炉と乳香の使用はあまり顧みられない（ウェブ：名古屋ハリストス正教会；日本正教会）。

図６　イエスの誕生を祝福する３人の博士。この３人を表現したものとしては最も古い、４世紀のローマの石棺の浮彫り
（Wikipedia-Adoration of the Magi）

１－４．『エリュトゥラー海案内記』

「…この地方は山地で近づき難く、空気は重苦しくて霧っぽく樹木から乳香を産する。乳香を産する樹木はさして大きくも高くもないが、ちょうど我々の土地のエジプトで或る種の樹がゴムを流し出すように、樹皮に凝固した乳香を産する。乳香は王の奴隷や刑罰のために送られた者たちの手で扱われる」『エリュトゥラー海案内記』第29節（村川　1993）。

紀元後１世紀にエジプトにいたギリシア人航海者がインド洋周辺の交易活動についてまとめたこの有名なガイドブックには、アラビア半島南部とソマリーランド（ソマリア）に産する乳香・没薬を求めてギリシア人、エジプト人、アラビア人、インド人の商人らが直接この地を訪れ、それぞれの土地の産物との取引によって栄えていたことが記されている（山田　1979：98－113）。と同時に、季節風を利用したインド洋航路が開発されることによって陸の交易路が衰退し、ローマ帝国を中心とする西方の人々の関心は乳香や没薬から香辛料と化粧料へと移っていくことになる（佐川　2000）。

１－５．イスラーム教

イスラーム教の聖典『アル・クルアーン（コーラン）』では、乳香にはほとんど触れられていない。その一方で、ムハンマドの言行録であるハディースには随所に記述が見られる。ただしその多くは宗教的なものではなく、治癒薬としての利用となっている。乳香を焚いて家内を消毒のために（？）燻すなどの香煙の利用とともに、去痰薬として気管支炎に効くとされるほか、不眠症や健忘症など神経性の病気の治癒、擦り傷や止血にも効力があるとされた。アラビア語の薬事書・医学書にも多数の記述がある（Marwat et al. 2009: 1473, 1477；ウェブ：Farooqi 2013: 5；Rana 2014；Tankil 2012；馬場　2015）。う蝕治療の窩洞充填に世界で初めて乳香を用いたのもアラビアの医師であったと推測されている（千葉・新谷　2009）。

また、香・薬剤としての利用とともに、他の香料と混ぜ合わせる際の固定剤としての需要が増して行った。さらにはイスラーム黄金時代とも呼ばれる８－13世紀頃には蒸溜法によって香油・香水が開発され、これがその後ヨーロッパに伝わり香水文化が花開く礎となっていった。

１－６．中国・日本へ

中国における乳香の初出は、陳蔵器が著した『本草拾遺』（739年）にある「乳香は薫陸香（くんろくこう）の一種である」という記述とされる。４、５世紀頃からすでに薫陸と呼ばれる香が西方から伝わっているものの、インドで他の香料とを混ぜ合わせた加工品などが多く出回り、当初は乳香を個別の香料として認識できなかったらしい（山田　1979：113、130－132）。

また日本には６世紀の仏教の伝来とともに薫香の文化が浸透し、寺院や朝廷の儀式などで香が焚かれるようになった。乳香については、『薫集類抄』（12世紀末）に登場する香作りの名手だった源公忠（10世紀初頭）が香を煉り合せた黒方（くろほう、くろぼう）を作る際に加えた薫陸が乳香であったとされている（藤巻 他　1980：49；谷田貝　2005：644）。

１－７．19－21世紀

アラビア半島南部の乾燥化とともに、乳香の需要の低下と燃料としての利用が進み、乳香樹の数が減少して行く時代が数百年にわたり続いた。しかし19世紀半ばになるとインドがオマーンから乳香を大量に輸入し、これを新たな技術で揮発性成分などと混ぜ合わせて化粧品や蝋燭、香などを作りボンベイから世界に向けて再輸出を行い始めた。こうして需要が改めて高まり、1939年にはドファール地方で乳香業に従事する3000人のもとで年間600－700ｔの乳香が生産され、収益高はオマーンの国家収入の75％を占めたという（Highet 2006: 120）。第２次世界大戦後になるとインドが輸入品に関して高い関税をかける方針を打ち出したことから、ボンベイに変わり当時のイギリス保護領アデンが乳香の世界への積み出し港となった。

その後、石油の時代の到来とともに、安価な化学薬品の調合によって人工的に調合した香料がイタリアなどで開発され、世界を席巻していくことになる。ソマリア産などの安い乳香の需要も高く、市場に大量に出回って行った。こうしてオマーンの乳香はその後今日に至るまで激減し、ドファール産の出来高は2005年頃には年間わずか10－12ｔにとどまるのが実情である。重労働でもある乳香樹の栽培や乳香の採取に従事するのは高齢者だけとなり、若い世代はより収入の高い石油産業や各種サービス業、あるいはアワビ漁へと移っている（Highet 2006: 120-121）。

２．オマーンの観光の現状と乳香の土地

２－１．オマーン概観

アラビア半島東部に位置するオマーンは、スルターン（君主）のカブース国王が統治するイスラーム教国家である。イスラーム教徒の多数は穏健派のイバード派が占め、キリスト教やヒンドゥー教など他の宗教にも寛容であることで知られる。面積30.95万㎢（日本の約85％）の土地におよそ442万人（2014年）の人々が暮らし、石油関連業、農漁業、観光業などの基幹産業に従事して暮らしている（ウェブ：外務省　オマーン国基礎データ）。

砂漠気候帯に属し中部や内陸部にはサウジアラビアへと連なるルブ・アリ・ハーリー「空虚な４分の１」砂漠が広がる一方で、北部には標高3000ｍを超えるハジャル山地、南部には標高1800ｍを超えるドファール山地が各々東西に伸びている（図７）。飛び地領であるホルムズ半島に突き出たムサンダム半島先端には、急峻な山々が沿岸にまで張り出し断崖絶壁が海に落ち込む「中東のフィヨルド」とも呼ばれる景勝地がある。

１年間の気温の高低差は17℃前後－40℃前後と温暖で、年間降雨量は100㎜ほどに過ぎない。そのわずかな雨の多くは南西モンスーンの影響を受けるドファール地方に集中し、霧も多く発生することで知られる。その際には地面が緑の草によって覆われ、雨とともに緑一色に一変するその景色を見るために国内外から観光者が訪れる。

オマーンは、およそ4000年前にはメソポタミア文明とインダス文明とを結ぶ仲介交易で重要な役割を果たしたと考えられている。2000年前以降はペルシアの支配下にあったが、その後７世紀にイスラーム教への改宗と同時に支配権を取り戻し、15世紀に至るまでアラブ世界とイン

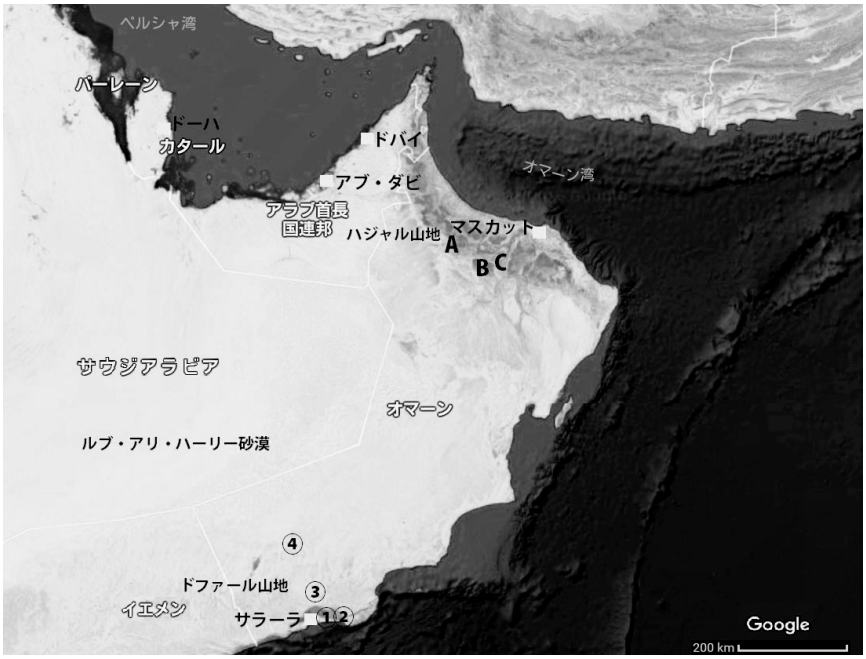


図７　オマーンの世界遺産　Ａ：バット、アル＝フトゥム、アル＝アインの考古遺跡群、Ｂ：バハラ城塞、Ｃ：アフラージュ、①アル＝バリードの考古遺跡、②ホール・ルーリの考古遺跡と自然環境、③ワジ・ダウカ乳香公園、④シスルの考古遺跡
（Google Map に加筆）

ド洋、東南アジア、中国を結ぶ海上交易によって栄えた。『アラビアンナイト』に登場するシンドバッドが活躍したのもこの頃で、乳香や没薬を携えて船出したのがオマーンであったとされている。

ヨーロッパ勢力の進出とともに16－17世紀半ばにはポルトガルの支配下に置かれるが、1650年に独立を果たしてアフリカ東岸に植民地を広げ、同国史上の全盛期を迎える。1832年には香辛料・奴隷・象牙貿易の拠点でもあったアフリカ沿岸のザンジバルに一時期遷都もしている。しかしその後同地は分割されて衰退し、1891－1971年の間はイギリスの（被）保護国となる（遠藤　2009；ウェブ：外務省　オマーン国基礎データ）。

ペルシア湾岸諸国の多くは大航海時代、あるいは19－20世紀にかけてヨーロッパ勢力の支配・影響下に置かれた共通点をもつ。ただしオマーンはアラビア半島の東端という地理的な立地条件ゆえに東方のアジア世界や南方のアフリカとの結びつきも強い。このことが他のペルシア湾岸諸国とは異なる固有の文化と風情を醸し出しており、大きな魅力となっている。

２－２．オマーンへのインバウンドの現状

オマーンの観光面における大きな魅力は、そこに住む人々とともに、前節で触れた固有の自然環境と歴史的背景にある。雄大な自然と多岐にわたる地形は、砂漠サファリを初めトレッキングやロック・クライミング、海浜リゾート、ダイビングなど多種多様な楽しみ方を提供して

いる（ウェブ：Oxford Business Group 2015；Wikipedia-Tourism in Oman）。

またこの国の歴史や文化を彷彿とさせるさまざまな産物が並ぶスーク（市場）やイスラーム教のモスクなどは、とくに遠方からのインバウンドの観光者にとってはエキゾチックな観光スポットにほかならない。一方で砂漠も広がる国土に都市や街は少なく、歴史的建造物の数もおのずと限られている。そのため、国内で登録された世界文化遺産は大きな価値をもつ。

図８　マスカットのマトラ地区
（2000年９月、撮影：小磯）

オマーンには「乳香の土地」（図７：①－④）を含め合計４ヵ所の世界文化遺産が1987－2006年に登録されている（図７：Ａ－Ｃ）。そのいずれもが数千年から数百年前に遡る考古学的な遺跡で[3)]、そのうちのひとつである人工地下水路を用いた灌漑システム「ファラジ」は、乳香と同じく今日なお日常的に使用されている生きた歴史・文化遺産ともなっている。また４ヵ所とはいえ世界遺産の数は湾岸協力会議加盟６ヵ国のなかで最多であり、インバウンドを呼び込む上で重要な役割をもつことにもなる。

湾岸協力会議は加盟諸国全体で観光促進・地域振興に力を入れており、2020年にドバイで開催されるエクスポ2020（ウェブ：Atalla and Nasr 2013；トラベルボイス　2013）やドーハで2022年に開催される FIFA ワールドカップなどが、オマーンを含む加盟国全体にインバウンドの増加と大きな経済的波及効果をもたらすことが期待されている。

オマーンへのインバウンドの主たる入国地は、北部に位置しオマーン湾に面した首都のマスカット（人口約80万人：2016年）と、アラビア海に面した南部のドファール特別行政区の中心都市サラーラ（人口約16万人：2016年。オマーン第３の都市。マスカットの南方約1000㎞）である（ウェブ：World Population Review 2016）（図７、８）。この２つの都市は、いずれも国際空港と大型クルーズ船が入港できる港をもつ。しかしながら乳香の土地観光の基地ともなるサラーラは海外からの乗り入れ便は少ない。同地を海外から直接訪れる観光者は限られ、マスカットからの乗り継ぎが主体であると思われる。

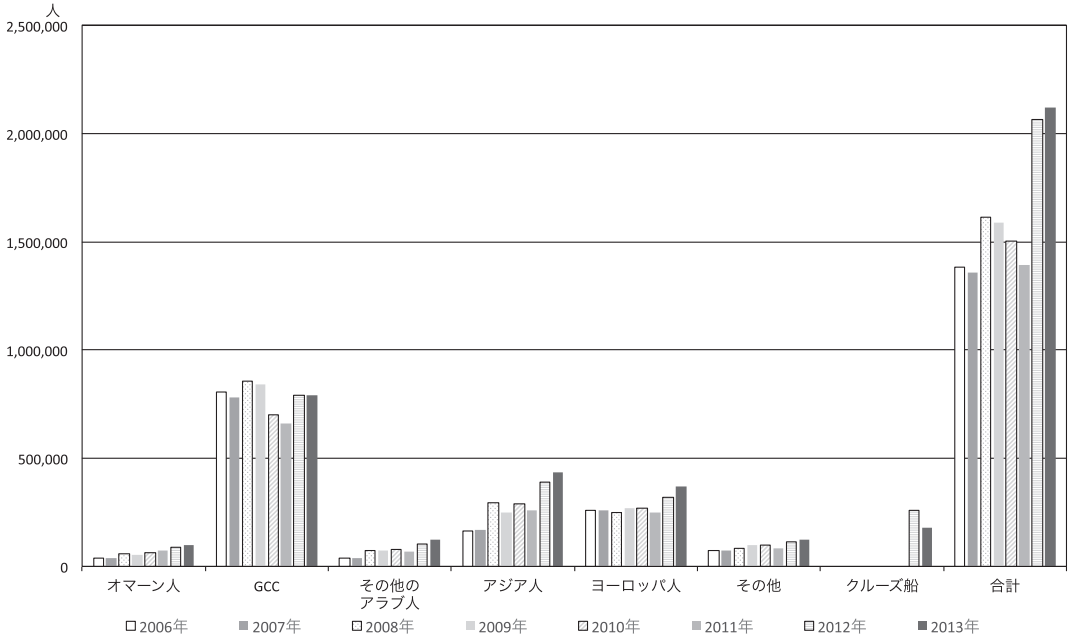
このほかとくに北部では、隣国のアラブ首長国連邦から陸路を車で訪れる入国方法も人気がある（ペルシア湾岸諸国には、サウジアラビアを除き鉄道が敷設されていない）。

オマーン政府観光省の2006－2013年度のインバウンドのデータを見ると、2006年から2013年の間に138.5万人から212.1万人へと50％の伸びを見せており、観光業は同国最大の産業へと発展しつつある（表１）（ウェブ：Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Statistics；Oxford Business Group；Wikipedia-Tourism in Oman）（2011年２月にはアラブの春に触発された政府に対する抗議活動が発生したため一時減少している）。また同じく乳香の産地をもつ近隣のエチオピア、ソマリア、イエメンが今日内戦などで一般の渡航が危険視されるなかで[4)]、オマーンを初めペ

表１　オマーンへのインバウンドと国内観光者

（Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Statistics, Inbound + Tourists by Groups 2006-2013 に基づき作成）

年	オマーン人	GCC	その他のアラブ人	アジア人	ヨーロッパ人	その他	クルーズ船	合計
2006年	38,998	807,403	38,490	165,794	259,077	75,244	NA	1,385,006
2007年	37,154	779,010	38,829	167,253	261,357	75,907	NA	1,359,510
2008年	57,347	856,379	75,354	294,726	248,192	82,705	NA	1,614,703
2009年	52,274	841,402	75,786	249,124	269,524	98,869	NA	1,586,979
2010年	62,721	700,377	80,223	290,587	270,138	98,174	NA	1,502,220
2011年	72,258	662,196	70,327	257,744	249,749	82,577	NA	1,394,851
2012年	88,802	789,461	103,422	388,508	321,388	115,654	256,721	2,063,956
2013年	97,863	793,466	124,319	435,067	371,741	121,196	177,577	2,121,229



ルシア湾岸諸国は安全が保たれていることも順調なインバウンドの増加に寄与している。

2013年のインバウンドの内訳をまず地域別に見ると、湾岸協力会議加盟諸国からが最も多く79.3万人（37.4％）を占め（2006年から小幅な増減を繰り返している）、次にアジアから43.5万人（20.5％：2006年から約2.6倍の増加）、ヨーロッパ諸国から37.2万人（17.5％：同1.4倍の増加）となっている（表１）。アジアからのインバウンドの増加傾向が著しい。

さらに2013年の国別（湾岸協力会議加盟諸国を除く）の上位52位までのインバウンドでは（表２）（Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Statistics-Oman_Number of Tourists + Visa +2011-2013）、１位がインド（24.5万人）で圧倒的に多い。さらに南・東南・東アジア圏諸国ではパキスタン（３位：6.8万人）、フィリピン（10位：2.5万人）、バングラデシュ（11位：2.0万人）、インドネシア（21位：1.2万人）、中国（23位：9460人）、マレーシア（30位：6975人）、タイ（31位：6612人）、スリランカ（34位：6162人）、日本（36位：5508人）、シンガポール（45位：2804人）、

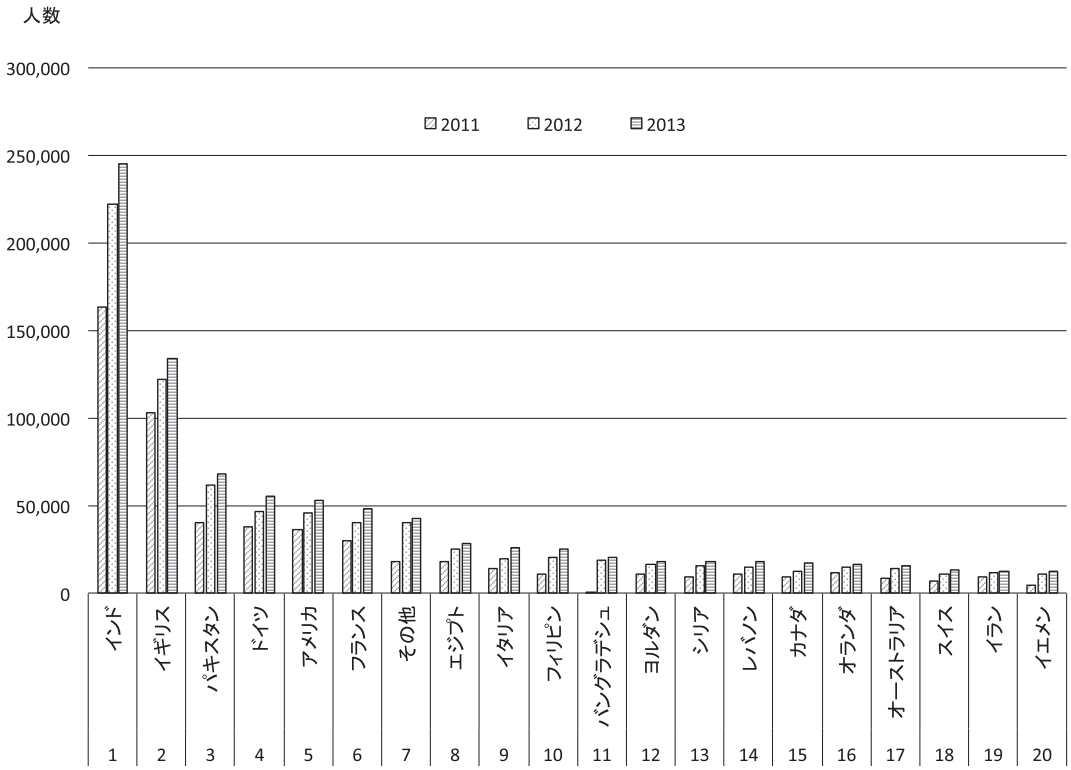
表２　オマーンへのインバウンド上位52ヵ国（Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Statistics, Tourists + Visa + 2011-2013 に基づき作成。グラフは上位20位まで）

	国　籍	2011	2012	2013
1	インド	163451	221,623	244,786
2	イギリス	102,806	121,528	133,529
3	パキスタン	39,994	61,198	67,893
4	ドイツ	38,034	46,652	55,126
5	アメリカ	35,984	46,073	53,165
6	フランス	30,040	40,105	47,830
7	その他	17,606	40,401	42,223
8	エジプト	17,606	25,148	28,541
9	イタリア	14,297	19,806	26,063
10	フィリピン	10,945	20,145	24,897
11	バングラデシュ	811	18,408	20,191
12	ヨルダン	10,942	16,116	18,008
13	シリア	9,256	15,198	17,654
14	レバノン	10,695	15,112	17,602
15	カナダ	9,128	12,213	17,254
16	オランダ	11,605	14,948	16,228
17	オーストラリラ	8,213	14,058	15,616
18	スイス	6,969	10,592	13,272
19	イラン	9,010	11,939	12,685

	国　籍	2011	2012	2013
20	イエメン	4,125	10,819	12,634
21	インドネシア	2,219	7,913	11,506
22	スウェーデン	8,329	9,680	10,762
23	中国	6,431	8,810	9,460
24	スペイン	4,087	6,593	9,318
25	スーダン	4,807	6,711	8,447
26	オーストリア	8,223	8,487	8,150
27	アイルランド	4,712	6,166	7,452
28	ベルギー	4,176	6,346	7,316
29	トルコ	6,695	7,566	7,229
30	マレーシア	5,086	6,452	6,975
31	タイ	2,897	3,945	6,612
32	イラク	4,566	5,812	6,430
33	タンザニア	5,053	6,035	6,330
34	スリランカ	3,630	5,414	6,162
35	南アフリカ	4,894	5,924	5,971
36	日本	3,954	6,398	5,508
37	ギリシア	1,959	3,264	4,618
38	デンマーク	4,001	4,786	4,603

	国　籍	2011	2012	2013
39	パレスチナ	2,495	3,533	3,819
40	ポルトガル	1,852	2,591	3,360
41	ノルウェー	2,062	2,820	3,330
42	ロシア	2,084	2,847	3,326
43	モロッコ	1,831	2,732	2,993
44	ポーランド	1,246	2,301	2,817
45	シンガポール	2,215	2,665	2,804
46	チェコ	919	1,301	2,472
47	チュニジア	3,537	2,912	2,155
48	フィンランド	1,368	1,939	2,130
49	ブラジル	1,768	1,881	1,588
50	アルジェリア	467	1,262	1,518
51	ハンガリー	911	1,443	1,464
52	台湾	406	361	501
	観光者小計	659,991	928,611	1,052,323

オマーン人	72,258	88,802	97,863
その他 GCC	662,196	789,461	793,466
クルーズ船入国者	–	256,721	177,577
観光者合計	**1,394,445**	**2,063,595**	**2,121,229**



台湾（52位：501人）と続く。ちなみに韓国は本データの上位52位には登場しない。ただし、ヴィザの種類別のデータが手元にないため正確な実数は不明ながら、これらアジア圏からのインバウンドは観光者よりも出稼ぎ労働者が実質的にその多くの割合を占めていると思われる。

ヨーロッパ諸国からはオマーンの保護国であったイギリスからのインバウンドが圧倒的に多く（２位：13.4万人）、以下４－９位（5.5－2.6万人）の間にドイツ、フランス、イタリアが並ぶ。アメリカ（同５位：5.3万人）も比較的多い。また８－20位の間にはエジプトやヨルダン、シリア、レバノン、イラン、イエメン、トルコ、イラクといった西アジア諸国からのインバウンドが顕著となっている。もっとも、これらの国々からのインバウンドは今日に至るシリア・イラク情勢のなかで、その後大きく減少していることが予測できる。

２－３．乳香をめぐる観光

数千年間に及ぶオマーンの乳香貿易は、前章で触れたようにとくに20世紀半ば以降、衰退の兆しを見せていた。地元の人々によって乳香が日常的に使われ続けている一方で、国際的な売上は減少し、ソマリア産などの安価な乳香が国際市場に多く流通した。

しかし皮肉にも、そうしたなかで乳香の土地が世界文化遺産に登録され、新たに観光という視点からオマーンの乳香の歴史と文化、その伝統が改めて見直されることになった。

前述したように、世界文化遺産「乳香の土地」には、乳香の群生地とともに、この奢侈品をめぐる歴史の証しである交易都市と港の遺跡とを合わせた４つのサイトが登録されている（図７：①－④）。これらを訪問する際に拠点となるサラーラから近い順に、以下に記す。観光者の来訪が集中する雨季の2016年９月の１ヵ月間の数値を参考までに付記した（Highet 2006: 98-108；ウェブ：UNESCO Land of Frankincense；Maugh 1992；Muscatdaily.com 2016；Oman Bulletin 2016；Wilford 1992）。

①アル＝バリードの考古遺跡：サラーラ中心部から東に４㎞ほどの沿岸部に位置する。紀元前1300－前300年頃に遡る港町で、紀元後12世紀頃まで栄えた。64万㎡の広がりをもち、アラビア半島南部最大規模の遺跡であるモスク跡なども残る。2007年には乳香の土地博物館が遺跡公園内に開館し、乳香交易によって栄えたオマーンの歴史や同国におけるイスラーム教の発展などについて展示されている（ウェブ：Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Museums）。2016年９月の１ヵ月間に来訪した観光者の数は11,266人。

②ホール・ルーリの考古遺跡と自然環境：サラーラの東方およそ35㎞に位置する。紀元前１世紀末頃の乳香交易の港と要塞跡。古代名サムフラム。乳香の貯蔵庫も発見されている（図９）。同観光者数6,939人。

③ワジ・ダウカ乳香公園：サラーラの北およそ40㎞に位置し、雨季にのみ水が流れるワジ（涸れ川）の低湿地に乳香樹が生茂る。紀元前３千年紀には採取が始まっていたとされる。乳香樹の多さとサラーラからの距離の近さから国立公園に指定され、およそ８㎢の土地が対象となっている。今日も一部で栽培が継続されているほか、環境保護・持続性への配慮として当初5000本の乳香樹が植えられ、これに近年さらに5000本が追加されている（図10）。

図９　サムフラムの遺跡（ホール・ルーリ）。海に面した門の両脇に乳香貯蔵庫が並ぶ
（2014年２月、撮影：森北周次氏）

図10　ワジ・ダウカ乳香公園
（2014年２月、撮影：森北周次氏）

同観光者数105人。

④シスルの考古遺跡：サラーラの北方およそ170㎞に位置する。紀元前２世紀－後３世紀頃のオアシス交易都市の遺跡。古代名ウバル。トーマス・Ｅ・ロレンス（アラビアのロレンス）が「砂漠のアトランティス」と呼んだ伝説の都市で未発見のままであったが、1992年にアメリカの調査隊が衛星写真の解析に基づき発見した。同観光者数52人。

これらのサイトへの観光者の数は、国内外からのインバウンドを合わせて年間でおよそ15万人（2014年）と報告されている（ウェブ：UNESCO Land of Frankincense）。ここでオマーンへの主要な入国地であるマスカット国際空港へのインバウンド数（2013年）をみると217.4万人であるのに対し、マスカットから２時間のフライトを要する乳香の土地への玄関口・サラーラ国際空港はわずか3.7万人に過ぎない（サラーラ空港に到着する国内観光者は15.6万人。ウェブ：Colliers International 2013）。クルーズ船でサラーラ港に到着するインバウンドも2.5万人（2013年。ウェブ：Oxford Business Group）にとどまる。したがって、15万人の大半は国内のオマーン人で、外国人観光者は数万人程度にとどまるとみられる。

とくにサラーラからより遠方かつ北方の砂漠方面に位置している③ワジ・ダウカ乳香公園と④シスルの考古遺跡へは定期バスなどが運行しているわけでもなく、訪れるにはツアーかタクシーを手配する必要がある。このことが観光者が極端に少ない理由であろう（ウェブ：Muscatdaily.com 2016；Oman Bulletin 2016）。各国の旅行会社はもちろん、日本でもユーラシア旅行社や西遊旅行、ファイブ・スター・クラブなどが乳香の土地観光のツアーを企画しているものの、「辺境の地」を訪れるイメージがあるのは否めない。

このようにオマーンへのインバウンドはマスカット訪問が主体で、サラーラへの観光者がきわめて限られているのが現状である。乳香そのものの入手であれば、多少割高になるとはいえマスカットのみならずアラブ首長国連邦のドバイやカタールのドーハでも容易く購入できる。そのため、かつて乳香交易で栄えた都市や港の遺跡、あるいは乳香樹が栽培されている場所を訪れたいという動機の有無・大小によって、サラーラへのインバウンドが大きく左右されると

いえるであろう。マスカットを訪れる217.4万人をいかにサラーラへと導くかは、オマーン観光の今後を大きく左右することになる。交通の便の改善やいまだ数が限られるサラーラのホテルの整備は（ウェブ：National Centre for Statistics and Information, Sultanate of Oman 2016: 496）、オマーンへのインバウンドを受入れる際の大きな課題にほかならない。

こうしたなか、廃れつつあったオマーンの乳香の伝統を維持・活性化させるため、1983年にカブース国王直々の命によって創設されたのが香水会社アムアージュであった（ウェブ：Amouage）。世界的な香水製造の拠点として知られるフランスのグラースの研究所と合同で、オマーン産乳香をベースにカルダモンや白檀、丁子、マンゴーやパパイヤなど世界中の香辛料や果物エキスなど120種類位上の香料をブレンドし、「価格を気にしない人々」向けの世界最高級の香水が開発されてきた。マスカット郊外に建設された工場では基本となる100種類ほどの香りの香水が製造され、国賓への贈り物としても使われているという。2006年以降には中国系のクリエイティヴ・ディレクターが就任し、新たな香りへの取り組みがグローバルな視点で進められている。この工場では一般見学者も受け入れ博物館のような機能も果たしており、ここを目的にマスカットを訪問する観光者も少なくない。

これらの香水は今日ではネット販売で購入できるものの、店頭販売ではマスカットのほかドバイ、ドーハ、マナマ（バハレーン）、クウェート、ジェッダ（サウジアラビア）、ロンドン、ローマ、クアラルンプールなどのアムアージュの店舗に限られ、日本では販売していない。

アムアージュの名声がサラーラ方面の乳香の土地へのインバウンドの増加にどれほど効果があるかは現状では不明ながら、少なくともオマーン産の乳香を改めて世界に知らしめ、そのネームヴァリューを高めた功績は大きい。国王の後ろ盾があって可能となった、オマーンの文化振興の一つの方法として注目できる。

３．乳香が結ぶ世界

サラーラのアル・フスン・スーク、マスカットのマトラ・スーク、ドバイのデイラ・オールド・スーク、ドーハのスーク・ワキーフなど湾岸諸国各地の市場には、その全体が乳香や各種香料を専門に扱っていたり、あるいは一部に専門店が並ぶなどして、常時焚かれる乳香の香りが辺り一帯に漂っている。もはや古の時代のように金と同じ価値をもつことはなくなったとしても（むしろだからこそ）、乳香を炭で焚き、漂うその煙の香りによって心身を清め衣服を焚き染める文化が、今もなお人々に受け継がれ生活の一部となっている。今日これらの土地がイスラーム教諸国であるため乳香の文化もまたこの宗教と結びつけて考えてしまいがちであるが、上述したように正教会やバチカン市国に象徴されるカトリックの教会でも振り香炉で乳香を焚くことが今日なお祭礼等において不可欠となっている。一方では、東方のインドや中国にも伝わっている。

また、2015年に著者がドーハのスーク・ワキーフの香水の店を訪れた際には、東南アジア産の香木が売られているのを目にした（図11a、11b）。当然ながら昔も今も香の取引は一方通行ではなく、東方アジアの産物もアラビア半島にまで運ばれているのであった。

図11a　香木も商う香水屋。スーク・ワキーフ、ドーハ（2015年９月、撮影：小磯）

図11b　東南アジア産の香木（撮影：小磯）

日本には仏教の伝来とともに香の文化が伝えられ、線香のほか雅な芸術にまで高められた香道が今日に至るまで受け継がれている。東方世界にはこのように焚きくゆらす香が伝わり発展したのに対し、西方世界では焚香とともにイスラーム文化のもとで開発された香水が浸透していった。すなわち香は、宗教や民族の枠を超えてヨーロッパから東アジアにまで至る人々に伝わったのである。長い歴史によって育まれた東西世界の香の文化の接点かつ原点のひとつがオマーンと乳香であった。

こうした視点に基づきつつ理解をより一層深めて行くことが、乳香に関わる観光促進と地域振興の活性化にも貢献することになると考える。

謝辞

覚書としてまとめた本稿執筆の動機の源は、以前に訪れたペルシア湾岸諸国やエジプトでの見聞にある。ただしより直接的には、2015年９月に神戸山手大学から水先案内人としてインドからギリシアまで乗船させて頂いた第88回ピースボートでの体験が大きい。アラビア海からペルシア湾、紅海から地中海へと辿る航海は、まさに乳香を初めとするさまざまな産物が東西に運ばれた道でもあった。

とくに乳香については、上陸したドバイやドーハでの見聞とともに、水先案内人パートナーとして一緒に勉強させて頂いた森北周次さんから、ご本人が訪問されたドファール地方のお話をお聞きすることができ大きな刺激を受けた。本稿の乳香樹などの写真はその時のもので、掲載することにご快諾頂き、深く感謝致します。そして乗船を許可してくれた大学とともに、乗船中にお世話になった大和田昌彦さんを初めとする多くのスタッフの方々には、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

註

1．乳香はインドのアーユルヴェーダにおいても医学的な処方に使われてきたとされるが、インド産と西アジア産の関係を含めた具体的な記述やその時代背景については検討を擁する。ただインドには固

有の乳香樹もあるとはいえ、オマーンないしその周辺地域の乳香も少なくとも2000年前にバルバリコン（現在のパキスタン）に輸入されている（『エリュトゥラー海案内記』第39節、村川　1993）。

２．巡礼路で有名な、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の天井から吊るされた巨大な振り香炉（ボタフメイロ）が知られる。

３．「乳香の土地」と同様に下記の３ヵ所がいずれも文化遺産として登録されている（ウェブ：UNESCO-Oman）（図７：Ａ－Ｃ）。

(A) バット、アル＝フトゥム、アル＝アインの考古遺跡群（1988年登録）：紀元前３千年紀にメソポタミア文明やインダス文明と銅などの交易で栄えたマガン国の遺跡群。

(B) バハラ城塞（1987年登録）：13－14世紀のオアシス都市の城塞。オアシスやスーク（市場）、ヤシの木立などが広がる都市全体を12㎞に及ぶ城壁が囲む。城塞は崩落の危険があったため1988年に危機遺産に登録されたが、その後修復・整備が進み2004年にリストから削除された。

(C) アフラージュ－オマーンの灌漑システム（2006年登録）：2000年以上にわたって使われてきた人工の地下水路ファラジ（アフラージュはファラジの複数形）を利用した灌漑システムで、北部に残る５ヵ所が対象となっている。

このほかアラビアオリックスの保護区が自然遺産として1994年に登録されたものの、密猟対策が不十分であったために頭数が激減し、さらにオマーン当局が保護区の90％を削除したために登録が抹消されている。これは世界遺産の登録が抹消された初めてのケースとなった。

４．日本外務省の海外渡航情報危険度レベル（ウェブ：外務省　海外安全ホームページ2016年10月21日現在）：エチオピア＝大部分がレベル２（不要不急の渡航中止）及びレベル３（渡航中止勧告）、ソマリアとイエメン＝いずれもレベル４（退避勧告）。

引用・参考文献

Highet, J. 2006 *Frankincense: Oman's Gift to the World*. Prestel Publishing, London.

Marwat, S.K., M.A. Khan, Fazal-ur-Rehman and I.U. Bhatti 2009 Aromatic Plant Species Mentioned in the Holy Qura'n and Ahadith and their Ethnomedicinal Importance. *Pakistan Journal of Nutrition* 8(9): 1472-1479.

Rackham, H. 1960 *Pliny Natural History with an English Translation in Ten Volumes*. Vol.IV Libr XII-XVI. William Heinemanns, London and Harvard University Press, Cambridge.

Schoff, W.H. (translated and annotated by) 1912 *The Periplus of the Erythraean Sea-Travel and Trade in the Indian Ocean by a Merchant of the First Century*. Logmnas, Green and Co. London.

Vine, P. 1995 *The Heritage of Oman*. Immel Publishing, London.

遠藤晴男　2009『オマーン見聞録―知られざる日本との文化交流』展望社。

佐川信子　2000「古代アラビアの香料」『中東協力ニュース』１－５頁。

千葉栄一・新谷明喜　2009「フランキンセンス（乳香）の歴史」『日本歯科医史学会々誌』28(2)：141－145頁。

日本聖書協会（編）　1977『聖書』日本聖書協会。

野田康弘　2012「新約聖書時代の乳香の薬用法」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』16：９－19頁。

藤巻正夫・服部達彦・林和夫・荒井綜一（編）　1980『香料の事典』朝倉書店。

ヒンドリー、アンガス　2011「中東・北アフリカ（MENA）地域における鉄道プロジェクト」『中東協力センターニュース』2011・4/5：62－77頁。

村川堅太郎　1993『エリュトゥラー海案内記』中央公論社。

谷田貝光克（編）　2005『香りの百科事典』丸善株式会社。

山田憲太郎　1977『香料の道』中央公論社。

山田憲太郎　1979『香料博物事典』同朋舎。

山花京子　2010『古代エジプトの歴史』慶応大学義塾出版。

ウェブサイト（以下、最終閲覧日2016.10.24）

Alhowaish, A.K. 2016 Is Tourism Development a Sustainable Economic Growth Strategy in the Long Run? Evidence from GCC Countries. Sustainability 2016 8(605).
https://www.researchgate.net/publication/304608658_Is_Tourism_Development_a_Sustainable_Economic_Growth_Strategy_in_the_Long_Run_Evidence_from_GCC_Countries

Amouage
http://www.amouage.com/about-us

Atalla, G. and A. Nasr 2013 Reinventing Tourism in the GCC. Building the tourism ecosystem. Strategy&.
http://www.strategyand.pwc.com/media/file/Strategyand_Reinventing-Tourism-in-the-GCC.pdf

Colliers International 2013 Oman-Muscat Economy Hotels-Market Gap.
http://www.arabianconference.com/images/uploads/OMAN-Muscat-Economy-Hotels-Market-Gap-Research-November-2013.pdf

Dubai Expo 2020
https://expo2020dubai.ae/content/theme.aspx

Environmental Society of Oman
http://www.eso.org.om/index/list.php?categoryId=304

Farooqi, M.I.H. 2013 List of Quranic and Prophetic Plants.
http://www.sabawoon.com/articles/pages/Quranic_Prophetic_Plants_2013.pdf

Gulf Digital News 7 February 2014 Oman signs $35 million railway deal.
http://archives.gdnonline.com/NewsDetails.aspx?date=04/07/2015&storyid=370091

IndexMundi Oman-International tourism
http://www.indexmundi.com/facts/oman/international-tourism

Lonely Planet Lonely Planet's Best in Travel: top 10 cities for 2012.
https://www.lonelyplanet.com/travel-tips-and-articles/76861

Maugh, T. 1992 Lost City of Ubar found in Oman, scientists say Satellite photos point to 'Atlantis of sands'. *The Baltimore Sun* February 5, 1992.
http://articles.baltimoresun.com/1992-02-05/news/1992036047_1_city-of-ubar-legend-queen-of-sheba

McGinley, S. 2012 Oman tourism eyes 12m visitors a year by 2020. HotelierMiddleEast.com
http://www.hoteliermiddleeast.com/13558-oman-tourism-eyes-12m-visitors-a-year-by-2020/

Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Dhofar Governorate.
http://www.omantourism.gov.om/wps/portal/mot/tourism/oman/home/sultanate/regions/dhofar/!ut/p/a0/04_Sj9CPykssy0xPLMnMz0vMAfGjzOL9gwKD3fxcTQwMvN0NDTyN3F0DDA2DDU0NTfQLsh0VAfUTWlM!/

Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Museums.
http://www.omantourism.gov.om/wps/portal/mot/tourism/oman/home/experiences/culture/museums/!ut/p/a0/04_Sj9CPykssy0xPLMnMz0vMAfGjzOItvc1dg40MzAz8fZzMDTyDQz0Mg92djC0sTPQLsh0VATQrLx4!/

Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Oman Tourism Official Site.
http://www.omantourism.gov.om/wps/portal/mot/tourism/oman/home/!ut/p/a1/hc-7DoJAEAXQb7GgZQcRJHYrIiJvVyNuY8AgkAhLAOX3XQmFhY_p7uTcZAZRFCFaxY8ii7uCVfHtlal6Vr21ExgrCXxNArCI5qqE6DL4CgcnDuDLYPjXPyI6EN3Em9nc4Z2lrYNlG6G9l10JsDQCfxeStWfMwFwpHJC5dzgoBsBUHsGPG7aIZjeWDP-ccJXIWoZok17TJm3Ee8PXedfV7UIAAfq-F5OiysQLKwX4VMhZ26Ho3aG6jKAIyqPW4skTywwgaw!!/dl5/d5/L2dJQSEvUUt3QS80SmlFL1o2XzZORkxQRUQxME84MTAwSVM4TTZTU0MzME81/

Ministry of Tourism, Sultanate of Oman: Statistics.
http://www.omantourism.gov.om/wps/portal/mot/tourism/oman/home/media/statistics/!ut/p/a1/04_Sj9CPykssy0xPLMnMz0vMAfGjzOItvc1dg40MzAz8fZzMDTyDQz0Mg92djC18DfSDU_P0C7IdFQEDvyLg/

Moure, C. 2016 Move Over, Dubai: 8 Reasons Oman Should Be on Your Must-Visit List. *Vogue* May 25th, 2016.
http://www.vogue.com/13440076/oman-muscat-travel-guide/

Muscatdaily.com 2016 119, 621 visit archaeological sites in Dhofar governorate since January. August 21, 2016.
http://www.muscatdaily.com/Archive/Oman/119-621-visit-archaeological-sites-in-Dhofar-governorate-since-January-4sh1

National Centre for Statistics and Information, Sultanate of Oman（オマーン国立情報・統計センター）2016 *The Reality of the Omani Tourism*.
https://www.ncsi.gov.om/Elibrary/LibraryContentDoc/bar_The%20reality%20of%20the%20Omani%20tourism%20Information%20and%20statistics_5c62c0f0-7338-453c-9962-81d7fe558d13.pdf

National Centre for Statistics and Information, Sultanate of Oman 2016 *Statistical Year Book 2016.*
https://www.ncsi.gov.om/Elibrary/LibraryContentDoc/bar_The%20reality%20of%20the%20Omani%20tourism%20Information%20and%20statistics_5c62c0f0-7338-453c-9962-81d7fe558d13.pdf

Oman Bulletin 2016 Al Baleed, Samahram sites attract 18, 362 people visit.
http://www.omanbulletin.com/story-z9082183

Oxford Business Group 2015 *The Report: Oman 2013*.
http://www.oxfordbusinessgroup.com/oman-2015/tourism

Rana 2014 Frankincense in Islam. *Oh so halal*.
http://ohsohalal.com.au/index.php?route=blog/article&article_id=57

Sultanate of Oman Oman Tourism
http://omansultanate.com/tourism.htm

Trankil 2012 Frankincense.
http://www.sultanah.se/trankil/?p=2609

UNESCO-Oman
http://whc.unesco.org/en/statesparties/om

UNESCO-Land of Frankincense
http://whc.unesco.org/en/list/1010

Wilford, J.N. 1992 On the Trail from the Sky: Roads Point to a Lost City. The New York Times. February 5, 1992.
http://www.nytimes.com/1992/02/05/world/on-the-trail-from-the-sky-roads-point-to-a-lost-city.html

Wikipedia-Biblical Magi
https://en.wikipedia.org/wiki/Biblical_Magi

Wikipedia-Land of Punt
https://en.wikipedia.org/wiki/Land_of_Punt

Wikipedia-Tourism in Oman.
https://en.wikipedia.org/wiki/Tourism_in_Oman

World Population Review 2016 Population of Cities in Oman Population
http://worldpopulationreview.com/countries/oman-population/cities/

Yahoo! Japan ブログ　2014.2.7「オマーンが、鉄道網建設計画をスタート」
http://blogs.yahoo.co.jp/bernardtezzler/38467557.html

外務省　オマーン国基礎データ
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/oman/data.html#section1

外務省　海外安全ホームページ
http://www.anzen.mofa.go.jp/travel/
国際耕種株式会社　1995「乳香の里から」『AAINews』２：１頁。
http://www.koushu.co.jp/NewsJ/News02-J.pdf
在オマーン日本国大使館　2015 Oman’s Most Valuable Perfume, ‘Amouage’.
http://www.oman.emb-japan.go.jp/150825-1.htm
トラベルボイス　2013「ドバイ、エキスポ2020の開催都市に―中東・アフリカで初」
https://www.travelvoice.jp/20131218-13801
名古屋ハリストス正教会　「正教の奉神礼―炉儀について」
http://www.orthodox-jp.com/nagoya/liturgy.htm#rogi
日本正教会　「聖体物や祭服」
http://www.orthodoxjapan.jp/tebiki/katachi03.html
日本ユネスコ協会連盟
https://www.unesco.or.jp/isan/list/asia_1/
馬場多聞　2015「イスラーム世界における乳香の研究」
http://www.cdij.org/shikohin/forum/data_13/resume_baba.pdf